

国際耕種は2014年に創立30周年を迎えました

国際耕種は昨年12月14日で創立30周年を迎えました。1984年に会社を設立し、1989年頃から開発コンサルタント業務を開始して以来、現在では10名の専門家で活動を続けています。30周年行事として、これまでの活動を皆様を紹介するとともに、これまでお世話になった方々への感謝も含めて昨年12月14日に創立記念パーティーを行い、また30周年記念写真集とAAINews記事を取りまとめたAAINews創立30周年記念版を発刊しました。

創立記念パーティーには、会社創立以来の知人／恩人、仕事でお世話になった方々、株主など約50名の来賓の方々に参加して頂きました。



式典ではおいしい料理を嗜みながら皆様からの祝辞を頂き、社員からは海外での農業支援活動、筑波での研修業務など国際耕種の活動の歴史と変遷を社員によるタスキリレー(下写真左から2~5枚目)で紹介しました。最後に、前代表である小島通雅からの挨拶、代表取締役・大沼洋康、新取締役・古賀直樹及び小島伸幾の紹介(下写真右上)を行い散会としましたが、引き続き延々と二次会／三次会で多くの方との楽しい懇親が続きました。

今回の30周年行事を準備しながら気付かされたことが多くありました。写真集作成では30年間の我々の専門分野・活動地域の広がり、そして活動を通して知り合い国際耕種を育ててくれた多くの現場仲間の存在でした。また、AAINews創立30周年記念版編集で特に感じたことは、AAINewsの情報発信力の大きさでした。AAINewsは社員が海外でほとんどばらばらに活動し、日常的な通信もままならない時の社員間の情報交流という意味合いで始めた情報誌です。1995年に創刊してから、これまで87回を発信し、34課題について紙面上で論議し、また日本を含め36カ国の紀行を73回にわたって紹介しています。発行のたびに多くの方々から励まし／お叱りをいただきながら作成していますが、我々が日頃考えていることがほぼ網羅されており、作成した我々としても一つの道標となっています。

これまで多くの方々のご支援で国際耕種をここまで大きく出来ました。国際耕種も世代交代という大きな転換期に来ています。若手の育成・発掘が急務となっています。皆様のご協力を頂きながら、今後も新体制の下で、本来あるべき適正規模、適正技術による国際貢献の一翼を担っていきたいと思っています。また、AAINewsも皆様への情報発信の源、社員間の交流の場として継続していきます。今後ともこれまで通りのお付き合い、ご支援の継続をよろしく願いいたします。30周年記念写真集はAAIホームページにも載せております。1970年代からの写真もありますので、是非ご覧ください。また、AAINews創立30周年記念版をご希望の方はご一報ください。

(社員一同)



インターフェースを考える <その4>

人と自然をつなぐ～インタープリター

環境教育と行動変容

農業普及では、普及活動を通して農民の行動変容を促すことを目的としているが、環境教育においても、感じる→知る→考える→行動する、というサイクルで、「行動変容」につながることをめざしている。しかし、1 回限りのイベント的なプログラムに参加しただけで、それが何らかの行動変容につながることもなかなか期待できない。

そこでプログラムに参加することによって、何かを「感じる」ことで、上記のサイクルに入っていくきっかけ作りをしたり、またリピーターとして別のプログラムに参加することによって、行動変容をもたらす可能性をより高めることができる。

インタープリターの仕事

インタープリターとは、環境教育プログラムを実施する場合に、人と自然をつなぐ役割をする。インタープリテーションとは、自然・文化・歴史等を人々に分かりやすく伝えることであるが、その主な目的は教えることではなく、興味を刺激し、啓発することである。したがって、単に知識そのものを伝えるだけではなく、その裏側にある「メッセージ」を伝える行為や技能が重要である。

印象付ける工夫

「聞いたことは忘れる、見たことは覚える、やったことはわかる」と言われるように、単に情報を伝達するだけでは、相手に残るものは少ない。したがって、いかにしてメッセージを印象付けるか、が重要であり、そのためには①インタープリターの資質、②プログラムデザイン、③教材の工夫の3つが重要である。



ホールアース自然学校
における研修風景

オマーンにおけるマングローブ環境教育

オマーンで実施したマングローブに関わる環境教育では、マングローブを初めて知ったという参加者も多かったため、プログラムを通していかに感じさせるか、また感じたことをどう残せるか、という観点からの「振り返り」を重視した。そのために、参加者におもしろかった活動にステッカーを貼ってもらうことで、プログラム全体を楽しみながらマングローブ林やマングローブ生態系について振り返るような工夫を行った。

また教材についても、マングローブ生態系の豊かさや重要性、保全の必要性等が伝えたいメッセージであるが、まずマングローブ林を知ってもらう、肌で感じてもらうことが第一歩と考え、マングローブクイズやロールプレイ形式のネイチャーゲーム、ビンゴカード等も使った親しみやすいものになるようにした。

インタープリテーションでは、「伝えよう」とするメッセージが相手に「伝わる」ようにするために、伝え手の思いと聞き手の関心を『つなぐ』ことが重要で、そのための道具立てや「スキル」も必要になってくる。オマーン C/P の本邦研修では、これまでの AAINews『環境教育の現場から』というシリーズでも紹介したような組織を訪問して、インタープリテーションに関する研修も行った。

普及活動で必要とされる普及員のコミュニケーション・スキルと同じように、インタープリターの「スキル」についても、研修で獲得できるものと、経験を積むことによって身に付けていく両方があり、日々の試行錯誤や研鑽が必要と考える。



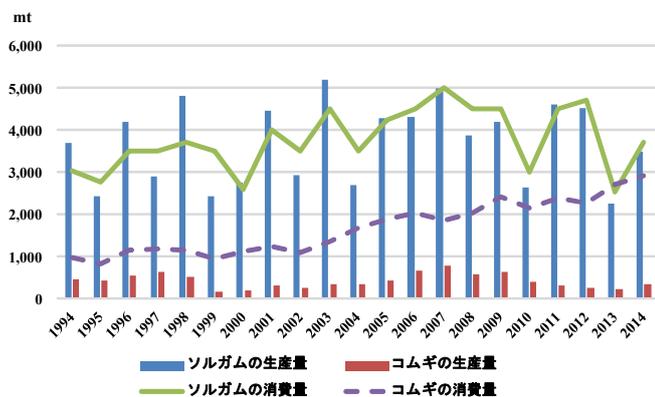
マングローブ環境教育
プログラムの振り返り

スーダンかつさら随想録 <その4>

ソルガムとコムギの粒食文化

スーダンの全耕作可能面積は8,400万haともいわれるが、定期的に耕作されているのはそのわずか14-15%にすぎず、実際の耕作地は約1,200万haと推計されている。灌漑農地での生産をふくめると、ゴマ、アラビアゴム、ラッカセイ、綿花、野菜、果樹などの多様な換金作物が栽培され一部は輸出向けとなる一方、圧倒的多数は面積比率85%の天水農業であり、ソルガム、パールミレットといった主穀生産がおこなわれている。天水農業は降雨依存型で生産性がひくい、その不安定性を広大な作付面積でおぎなっている感じになるだろうか。カッサラの天水農業では、ソルガムの栽培面積が図抜けており、生産量でも No.1 の地位を占めている。

しかし、近年の消費量からみると、次図に示したとおり、コムギが伸びており、ソルガムに接近してきていることがわかる。



スーダンのソルガムとコムギの生産量と消費量 (Index mundi より作成)

スーダンにおけるコムギ生産は、将来的に灌漑農業での収量増産が期待されるものの、今のところ需要に生産がおいついておらずロシアなど国外からの輸入量がおおい。カッサラでの生活実感としても、「キスラ」とよばれる薄焼きのソルガムのクレープ状パンと比較して、工場で製造されるコムギパンを購入するスーダン人が増えてきている印象をうける。周囲に理由をきくと、嗜好性の変化もさることながら、家庭内での労働の手間や燃料費を考えると、コムギパンを購入したほうがかえって安くつくのだという。国産のソルガムより輸入のコムギで製造した食品が流通面でいくとずっと身近になっ

ているわけである。



市販されるソルガム粒



製粉されたソルガム

さて、もうひとつコムギとの比較において、ソルガムの利用面でもおもしろい発見があった。ソルガムはコムギとおなじく粉食が一般的であるとおもいこんでいたが、スーダンにおいて伝統的粒食利用があることがわかったのである。



未熟穂 (アクラモイ種)



未熟穂 (ファタリータ種)

しかもそれはシリアの村でみたコムギの粒食とそっくりであった。シリアでは、青コムギを穂刈りし、水分含量のたかい状態のまま火であぶったものを「フリーク」と称して旬のたべものとして珍重され消費されていた。それとまったくおなじ利用法がスーダンのソルガムで見られ、水分含量の高い未熟穂は「ファルーク」と呼ばれていた。両者は春と秋とで収穫時期は異なるが、類似のアラビア語呼称、そして共通の粒食文化をスーダン片田舎のカッサラで見いだし、いつしか20年前のシリアの農村部におもいをはせていた。



粉食の代表格である
キスラ粉食

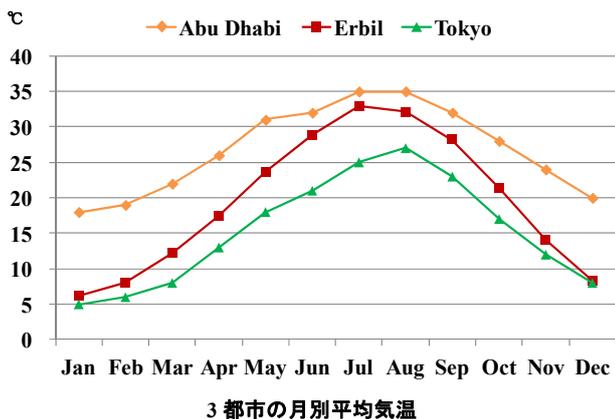


ファルークのソルガム粒
を使用した料理

イラク国クルド地域のハウス事情

1970 年代からハウスを使った栽培を行っていた UAE などの湾岸産油国とは違い、クルド地域でハウス栽培が始まったのは 2000 年代に入ってからと、その歴史は浅い。クルド地域で見られるハウスは、レバノンから輸入されたものがほとんどで、黄色いポリエチレンで被覆された半円型である。また、クルドのハウスは簡素なものが多く、一般的なハウスにはパッド・アンド・ファンなどの冷房装置は設置されていない。

クルド地域の中心都市であるエルビルの平均気温を見てみると、夏場は UAE のアブダビと同等に 30℃を超え、冬場は東京並みに 5℃くらいまで下がる。これは、クルド地域のハウスでは、夏期には UAE 並みの冷房が、冬期には日本並みの暖房設備が必要であることを意味しており、冷房の事だけを考えていた UAE とは違う考え方が求められるのではないと思う。



クルド地域では、夏期にはハウスの正面と背面のポリエチレンシートをネットに変え、通気性を良くすることで暑さに対応している。しかし、それでも日中のハウス内気温は 50℃を超えることもあることから、作物にも作業する人間にも過酷な環境であり、ハウスに入る事自体が苦痛となる。あまりに暑いため、ポリエチレンシートが重なっている部分を強引にずらし、隙間を作ることで換気を試みているが、あまり効果的とは言えない。しかも、



夏場はネットを張る



無理やり換気

この隙間にはネットも無いので害虫や小動物も来放題である。ハウスに側窓を付けたり、被覆資材を変えることで、もう少し改善できるのではないと思う。

気温が下がっていく夏から秋にかけて、クルドのハウスではズッキーニやキュウリ、ナスなどが栽培され、無加温で収穫できる期間だけ栽培を行う。通常 10 月下旬には栽培が終了する。そして、年間を通じてもっとも寒い 11 月から 3 月までは栽培を行わず、4 月ごろからトマトやキュウリなどの果菜を栽培することが一般的である。しかし、これでは露地栽培と大差なく、せっかくのハウスの優位性を生かし切れていない。ごく一部の篤農家では、家庭用のストーブなどを使ってハウスの加温を試みているが、農業用のストーブは国内の資材店では購入できず、農家自身が直接海外の業者から購入しなければならないため、まだまだ一般的ではない。



クルドの温室を暖めるストーブたち

このように見て来ると、現状のクルドでハウスを使うメリットは、秋作の収穫期間を数週間伸ばす程度でしかなく、ハウスの設置費用や夏の高温なども考慮すると、そこまで魅力的な選択肢であるとは思えない。しかし、イラクの農産物はトルコやイラン、シリア、ヨルダンなどの周辺国からの輸入に頼っており、自給率の向上という観点からもイラクの農業地帯であるクルド地域の園芸技術向上は重要な課題である。地政学上のリスクはあるものの、順調に経済が発展し、人口も増えているクルド地域では、今後、農業分野への投資も増えていくものと思われる。ハウスを有効利用するためには、周年で栽培を行い、稼働率を上げる事が一番である。海外からの資材に頼るばかりではなく、クルド地域に最適化した施設栽培法を確立していくことが大切になってくるのではないだろうか。